

◆江戸の基層としての中世武蔵国

江戸成立の前史として、古代・中世からのつながりを踏まえる必要がある。江戸はどのように成立し、その背景となる地域構造はどう変化したのか。関八州の各国の位置づけ、とりわけ武蔵国の地域構造を読み解く必要がある。

古代・中世における武蔵国の中心は武蔵国府としての府中である。古代に形成された条里制と五畿七道の基盤のもとに、平安末期の荘園開発から武士の台頭が始まった。武蔵国においては秩父平氏が各地に展開していった。天変地異の多発もあり、中世前期の動乱を経て鎌倉幕府が成立した。幕府が全国に及ぶ力を持つとともに、地域構造が大きく変化し、坂東武士が全国各地に進出することとなった。鎌倉末期には、元寇の外圧と応仁の乱の勃発により全国が疲弊し、鎌倉幕府が滅びると戦国時代へと移行していく。力の拮抗する武士団の長期抗争で武蔵府中は疲弊し、中心は浅草・江戸に移行し始めた。

◇関八州中世における水都の分布

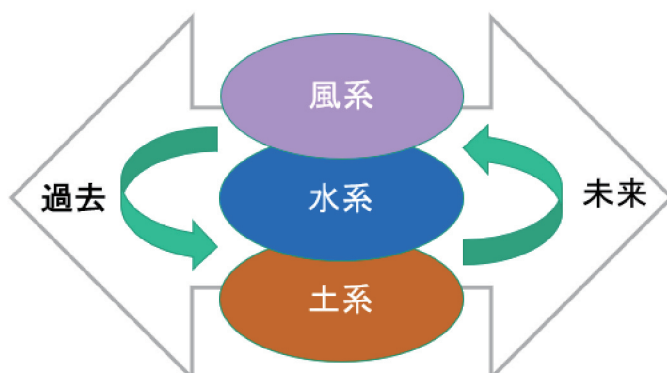
各国の中心である国府は古代に成立し、軍事上、流通上の必要性から水運、陸運の要所にあった。水は生存の基盤であり、関八州においても国府は豊かな水に恵まれ、水都としての性格を有していた。太平洋岸の各国は海洋型の水都で、武蔵など内陸型の国は大河川に立地した。中世に入ってもその基本構造は維持されたが、その後、元寇、南北朝の動乱を経て地域が再構成されていく過程で、国府や郡都以外の軍事拠点として城都が展開されていく。城都の多くも水都の性格を持ち、中でも太田道灌により構築された江戸城は、浅草湊の繁栄と相まって水都の条件を備え、後の「水都江戸」の礎となった。

◇武蔵国における水都

武蔵国の国府は「水都府中」と呼んで差し支えない。多摩川と東山道武蔵路の交差する要衝の地であり、何よりも清冽な多摩川と豊かな湧水、地下水に恵まれていた。多摩川が急流河川であることから、舟運としては不利であったが、古代都市の軍事上の防御からは有利な地勢であった。古代には、飛鳥京、平城京、平安京など多くが盆地に立地している。武蔵府中も多摩川の中流部に位置して盆地状に開けた空間を有している。多摩川から遡上して舟を使える最奥で、東山道からも東海道からも最奥に位置する。

エコヒストリー

絵図の作成にあたり、法政大学エコ地域デザイン研究センターの手法である歴史とエコロジーを組み合わせた「エコヒストリー」の視点から制作を行った。過去から未来への時間軸に対して、空間軸として土系、水系、風系を重ね合わせた事象を取り上げて時空絵図とした。



風系：気温、湿度
大風、大雨、疫病

水系：海、川、湖沼、湧水
洪水、津波、舟運、湊

土系：地形、地質
地震、火山噴火